

〔論 文〕

舞台の上のジャーナリスト

——近代ドイツ喜劇におけるジャーナリスト像とその言語意識——

細 川 裕 史

I. 舞台の上のジャーナリスト

滑稽にデフォルメされた似顔絵は、ときに、写実的な肖像画よりもその人物のもつ印象をうまく描き出す。同様に、喜劇に登場するキャラクターもまた、そのデフォルメゆえに特定の人物像をうまく描き出すことができるのではないだろうか。たとえば、ゴットホルト・エフライム・レッシングの『ミンナ・フォン・バルヘルム』(1767)では名誉へのこだわりを通じて、また、カール・ツックマイヤーの『ケペニックの大尉』(1931)では命令への盲信ぶりを通じて(誇張された)軍人らしさを描写している。さらに、『ケペニックの大尉』では、軍用語や命令口調などのいわゆる〈兵隊ことば〉が、笑いを引き起こしたり、物語の進展をもたらしたりしている。

ところで、ドイツ語史研究に社会学的視点を導入した最初期の研究者であるEggersは、その著書のなかで、特定の時代の言語を研究する際に適切なテキスト種として新聞を扱っている。しかし、彼によれば、しばしば言及され、また批判されてきたにも関わらず、〈新聞ことば〉が「言語的統一体」であったことは一度としてない¹⁾。〈新聞ことば〉とは、結局のところ、グリムの辞書が示しているように、ジャーナリストが使用する言語をひとくくりにした〈ジャーナリストことば〉の同義語にすぎないのだ²⁾。

では、喜劇の舞台において、ジャーナリストはどのように描かれてきたのだろうか。彼らの使用する言語や言語意識は、時代ごとの言語使用や言語意識を反映し、かつ誇張を通じて(当時の観客にとって)よりジャーナリストのもの

らしく描かれているのではないだろうか。本論文では、ドイツにおいて新聞がマスメディアへと発展していく段階にあたる18世紀末から19世紀中期にかけて書かれた戯曲に基づき、この問いについて考察していく。

II. ジャーナリストを主人公としたドイツ喜劇

本論文であつかうのは、それぞれ、18世紀末、19世紀初頭、19世紀中期に出版された以下の3本の戯曲である³⁾。

- a) アウグスティン・ツイッテ (Augustin Zitte, ca. 1750-1785) の『新聞編集長たち』⁴⁾ (*Die Zeitungsschreiber*, 1781)
- b) シュテファン・シュッツェ (Stephan Schütze, 1771-1839) の『ジャーナリストたち』 (*Die Journalisten*, 1806)
- c) グスタフ・フライターク (Gustav Freytag, 1816-1895) の『ジャーナリストたち』 (*Die Journalisten*, 1854)

II. 1. ツイッテの『新聞編集長たち』

ツイッテのこの「笑劇」(Schwank)は、ジャーナリストが主人公のドイツ語劇としては、最古の部類に入るだろう。ツイッテは、当時オーストリア領だったプラハの聖職者であり、1780年代には説教集や宗教改革者の伝記も出版している⁵⁾。この劇の冒頭で、主役の一人である「エアランゲンの編集長」が定期購読者のリストを見ながら悦に入っているように、ツイッテにとって、新聞は購読者(の数)を意識して作られ

るべきものであった。この作品は、彼が『プラハ郵便新聞』(*Prager Postzeitung*)の編集を引き受けた際に書かれたもので、新たに新聞を刊行することになった「新入り」(Fremder)が新聞業者による「会議」に参加する、という2場の喜劇の形をとってはいるが、実質的にはツイッテ自身の新聞編集にたいする所信表明、あるいは購読者を獲得するための宣伝広告である⁶⁾。

そのためか、登場するほとんどの新聞編集長は、まともなセリフもなく、ただ彼らの編集する新聞の記事内容や文体の良し悪しが報告され、「議長」によって今後の運営について指図をうける、というだけの役回りである。それぞれの編集長が扱う新聞の記事内容に比べると、その文体についてはごくまれに、しかもごく簡潔にしか論じられていない。たとえば、「ベルリンの編集長」は「彼の書き方は、まずまず(erträglich)」(Zitte 1781: 24)と評され、また、「エアランゲンの編集長」は「報告係」によって以下のように紹介されている。

エアランゲンの編集者は、たとえ新聞のことば(Zeitungssprache)やふさわしい読み物は持ちあわせていないにしても、ウィットに富んでいて文芸に通じた(schöngeistig)頭脳と良いことば(gute Sprache)の持ち主です。[...]彼は、新聞の世界ではとてもよく読まれています。とりわけ、彼が「さあ! さあ!」と狩りたてて、即興で(aus dem Stegreife)見つけだしてきた感じのよいお話や出来事のおかげで。(Ebd.: 18)

しかし、どのような書き方が「まずまず」で「良い」のか、また「新聞のことば」とはどのようなものを指すのか、具体的には触れられていない。その一方で、19世紀において〈教養市民ことば〉の模範とされたゲーテの文体が、すでにジャーナリストの手本として名指しされている点は興味深い⁷⁾。「エアランゲンの編集長」は、「バイロイトの編集長」に社交辞令を述べる際、彼の部下である「ボヘミアの特派員」につい

て以下のように述べている。

今すぐというわけではないが、私もあんな特派員と親密になってみたいものですな。あの男は、及第点の(passabel)文体で……ゲーテふう(a la Goethe)で、力強く、温かみがある文体で、真実からまったく逸脱しない優美なニュースを書きますね。(Ebd.: 9)

作中の編集長については、活動している地名が示されているのみだが、例外的に、ツイッテと同時代にウィーンで活動していたフリードリヒ・ユストゥス・リーデル(Friedrich Justus Riedel, 1742-1785)のみが実名で登場している⁸⁾。「報告係」は、リーデルの週刊文芸新聞がオーストリアの文学界に貢献していると好意的に述べるが、「議長」はあからさまに敵意を示す。

議長：[...]ほう? これが、あのリーデル?
おやおや! ……おまえが(er), どうしてあんなにも批評めいた駄弁を弄する(kritikakeln)のか、知りたいもんですな。
リーデル：「おまえ」ですと! 「おまえ」ですと! 議長どの、私は評論(Recension)を書いているのですぞ。
議長：おまえの、いや、貴方(Sie)のおっしゃるとおり! しかし、罵倒(Schimpfen)せずにすますこともできたでしょうに。
リーデル：罵倒ですって! 何が罵倒なもんですか! 私は真実を……
議長：なに、真実ですと! どこがどう真実なんです? 誰もが、ひやかされたりせずに(ungeneckt)いなければならないと思うんですがね! このお方は、きっと政治的な新聞を書いているんだらうな!(Ebd.: 27)

歴史上のリーデルがたずさわった新聞も、「空虚な皮肉や手紙などを用いる死に絶えたジャンルの惨めな落後者」(ADB Bd. 28 1889: 523)と酷評されているため、「議長」の非難め

いた態度は、ツイッテの同時代人たちの意見を代表するものだったのかもしれない。しかし、リーデルに対してだけでなく、作者は一貫して、時事の客観的な報道を有用な記事とみなしており、新聞が主観的な、あるいは「政治的な」論評に紙面を割くことに否定的である。作中では、さまざまな人物の口を通じて、この点を主張させている⁹⁾。この価値観は、結末部で「新入り」が、5カ条からなる編集方針を述べる際にも表れており、その内容を要約すると以下のようなようになる。

1. 状況にあわせて用いることば (Sprache) は変えるが、基本はユーモアのある調子で、いつも理解しやすく (faßlich) 分かりやすく (verständlich) 書くこと
2. 事実即して記事を書くこと
3. 確かな情報源に基づいた自国のニュースを主要記事とすること
4. 新聞記者は歴史家と同様の義務を負っているのだから、きわめて厳重に中立 (unpartheylich) であること
5. 祖国の榮譽になるのであれば、愛好家向けに文芸に関するニュースも報道すること¹⁰⁾

第一の方針には「新入り」の言語意識が明言されているが、その際に、彼は特に、ゲーテの文体を評価していた上述の「エアランゲンの編集長」の文体を批判し、彼のような「気取って (gesucht)、もったいぶった (geschraubt)、気品のある著作を下手に模倣するような (ehrwürdigen Schriften nachstümpert)」(Zitte 1781: 33) 書き方は絶対にしない、と宣言している。

この作品で描かれている2種類のジャーナリストは、以下のようにまとめることができる。つまり、文芸に通じ、ゲーテふうの文体や「気取って、もったいぶった」文体を好んで用いる文芸新聞のジャーナリストと、論評を出来るかぎり避け、ニュースを「理解しやすく、分

かりやすい」文体で客観的に伝えることを重んじるジャーナリストである。そして、前者はすでに一定の評価を得ている編集長として、後者はまだなんら実績のない「新入り」として描かれている。「新入り」が成功を収めたかどうかは描かれていないが、少なくとも、その方針を実践しようとしたツイッテ自身は、読者の支持を得られず、この作品を発表してからわずか1年後には編集から手を引いている¹¹⁾。おそらく、当時のプラハの読者は、客観的なニュース報道よりも、ツイッテが忌避した気取った文体による文芸批評や「罵倒」を好んだのだろう。彼の笑劇から25年後に書かれたシュツツェの喜劇では、まさにそのような新聞紙上における批判合戦に対する人気が中心テーマとなっている。

Ⅱ. 2. シュツツェの『ジャーナリストたち』

シュツツェは、ヨハンナ・ショーペンハウアー (Johanna Schopenhauer, 1766-1838) のサロンに出入りしていた作家の一人で、ゲーテの友人であり、またワイマールの同時代人にとっては著名な奇人でもあった。博学であった彼は、美学に関する理論書や娯楽作品を執筆する一方で、文芸新聞の編集長としても活動している¹²⁾。彼は、批評家として演劇を論じており、また『滑稽さの理論』(Theorie des Komischen, 1817) という著書まであるが、彼のこの1幕喜劇は、文学史上あまり顧みられていないし、後述するようにフライタークから酷評されている¹³⁾。

この作品には、二人のジャーナリスト(ビルケンシュトック [Birkenstock] とフリーダーブッシュ [Fliederbusch]) が登場する。彼らは、ともに博士号を持っており、したがって「学識者」(Gelehrter) であり、また「ジャーナリスト」であるとともに「作家」(Dichter) とも表現されている¹⁴⁾。彼らの文体については述べられていないが、自らを臆面もなく「作家」と自称しているところから、ツイッテの作品に登場する文芸新聞の編集長のように、気取って、もったいぶった文章を書いていたのだろう、と考える

こともできる¹⁵⁾。両名とも、商売敵への辛らつな批判を専らとし、また、作家としての名誉心があるようではあるが、結局のところ生活のために日刊文芸新聞を刊行しており、読者をただの金づるとみている¹⁶⁾。つまりは、ツイッテが批判的に描いた類のジャーナリストである。この作品におけるクライマックスのひとつは、激しく反目しあっていたはずの両編集長が、実は敵対関係を演じていただけだったということが発覚する場面であるが、その理由は文学的な思想からではなく、読者の関心をひいて新聞の売り上げを伸ばすためであった¹⁷⁾。

フリーダーブッシュ：なあ、兄弟、僕らの新聞をこの調子で続けていくなら、今後のためのアイデアはどこで手にいれようか？

ビルケンシュトック：おい、このままじゃ続けていけないってなったら、今度は、罵りあうんだよ。読者は、そういうのが大好きらしいから。[...]もし君が来てくれなかったなら、いったい僕はどうなっていたと思う？ 僕の新聞 (Journal) は、とっくに忘れさらられていただろうよ。

フリーダーブッシュ：まったく同じことを、君に言わなかったっけ？ 今日日、ペンで攻撃する相手のいないような奴は、まったく見過ごされてしまうもんな。(Schütze 1806: 29f.)

この作品で興味深いのは、フリーダーブッシュをめぐって、「博士」あるいは「作家」に対する好意的な評価と「ジャーナリスト」に対する否定的な評価が下されている点である。この対比は、彼の登場以前に、恋人である「令嬢」が意中の人物を「女中」に打ち明ける場面で、すでに描かれている。

女中：あらまあ！ それで、お相手はどなたのですの？ お伺いしてもよろしいでしょうか？

令嬢：世間では、フリーダーブッシュと呼ば

れている人よ。

女中：なんですって？ 『髪袋』の編集をしている、あのジャーナリストですか？

令嬢：あの人気作家、とお言いなさいよ。

女中：(脇ゼリフ) ここまで聞いたら、もう十分。(令嬢に) お嬢さま、それはゆゆしき (schlimm) ことですわ。とても、ゆゆしきことです。

令嬢：分かっているわ、ハンス・フォン・ローゼンドルンの娘であるこの私が、彼と交際しようだなんて考えちゃいけないことは。でもね…… (Ebd.: 13)

もっと端的にこの見解を示しているのは、オットー大帝の末裔であることを誇りにしている貴族フォン・ローゼンドルン退役少佐で、彼は、両ジャーナリストの学識に敬意を表し、しきりに「博士殿」(Herr Doctor) とへりくだった態度で呼びかけるが、新聞編集は単なる「お楽しみ」(Spaß) に過ぎないと軽視している。そのため、フリーダーブッシュが自分の娘と恋仲だと知ると、名誉の問題を持ち出し、彼がジャーナリストであることを非難する。それに対しフリーダーブッシュは、ジャーナリストの名誉については弁明しようとはせず、自分が実は貴族の息子であることを明かそうとする¹⁸⁾。

少佐：なんたることだ！……ユルゲ、ワシが七年戦争で用いたあの剣を持ってまいれ。重大な話をするからには、身なりを整えたいからな。[...]ワシは、娘をジャーナリストと結婚させたりなんぞしない。もし、貴方に名誉という観念が備わっていたなら、そんなこと、思いつきもしなかったでしょうがな。

フリーダーブッシュ：名誉という観念ですって？ いいですか、少佐殿、貴方は僕を見誤っています。僕は、貴方が思っているような男じゃないのです。僕は…… (Ebd.: 43)

ツィッテの作品では、文芸批評家気取りの編集長と、彼らの編集方針に反感をもっている「新入り」との対立構造が前面に押し出されており、ジャーナリスト像および彼らの相反する言語規範意識が多層的に描かれていた。しかし、シュッツェの作品では、新聞編集およびそこで使用される言語に対して規範意識をもったジャーナリストは一切登場せず、なれあいの批評を行うだけの新聞編集長が平板に描かれているにすぎない。彼らは、ジャーナリストとして生活していながら、自らを博士で作家、あるいは貴族の息子であると自認しており、その生業に対しては信念も誇りも持っていないのである。ジャーナリストとしての職業意識に関していえば、彼らは、ツィッテの描いた編集長たちよりも退化している。この作品が出版された50年後に、フライタークは出版者ザロモン・ヒルツェル(Salomon Hirzel, 1804-1877)に宛てた手紙(1856年9月5日付)において、この喜劇を以下のように評しているが、以上の点からみて、的を射ているといえるだろう¹⁹⁾。

私たちには、シュッツェの喜劇はなんとも子供じみていて、月並みに思えますね——実際、昔ながらのハンス・ヴルスト劇ですよ、これは。それに、この[作中で描かれている]日刊文芸新聞の、なんと未熟なことでしょう。こんなふうな、50年後の人は、私たちの[後述する戯曲の]ジャーナリストを、子供じみた報道陣や教養レベルの模写だと見なすかもしれませんね。そのとき、進歩があったことにも気づいてもらいたいものです。(Freytag 1994: 104)

では、フライタークが誇りを持って述べている「進歩」とはなんだったのだろうか。以下の節では、彼の戯曲を紹介しつつ、この問いの答えを考察する。

II. 3. フライタークの『ジャーナリストたち』 Koszykは、ドイツ新聞の歴史を論じた著書

(1966)の中で、「軽蔑される新聞記者」という小節を設け、19世紀に「新聞の質の低下」が論じられていたことを指摘している²⁰⁾。Koszykがここで「軽蔑される新聞記者」として唯一名前を挙げているのは、しかし、歴史上のジャーナリストではなく、フライタークの喜劇『ジャーナリストたち』に登場する脇役、「主義主張のない記者」(Koszyk 1966: 224) シュモックである²¹⁾。この喜劇が当時大変な人気を博したことをかんがみると、Koszykがとりあげたように、19世紀中期のジャーナリスト像を研究する際、この架空の専業ジャーナリストを無視することはできないだろう。この4幕喜劇は、すでに1848年から『国境の使者』(*Grenzboten*)の編集者であったフライターク自身のジャーナリストとしての経験と、同年にプレスラウで行われた選挙戦に基づいて書かれたもので、「レッシングの『ミンナ・フォン・バルンヘルム』(1767)とハインリヒ・フォン・クライストの『こわれがめ』(1808)について最も成功したドイツ喜劇」(KreiBig 1966: 123)とみなされている²²⁾。フライターク自身が10年以上にもわたって週刊誌を編集してきたにも関わらず(あるいは、まさにそれが原因で)、この戯曲の登場人物たちは、新聞やその言語に対してしばしば批判的な発言を行っている²³⁾。それゆえ、Bertsch (2000)が言うように、フライタークを「新聞(Presse)を批判しながら、その言語についても意見する[...]グループの代表者」(Bertsch 2000: 30)とみなすこともできるだろう。

舞台には、英雄(自由主義のジャーナリスト)も引き立て役(保守的あるいは思想のないジャーナリスト)も登場する²⁴⁾。しかし、主人公であるボルツ(Bolz)博士もオルデンドルフ(Oldendorf)教授も今日では顧みられていない一方で、引き立て役にすぎなかったはずの「なんの見解も持たずに行を埋める三文文士」(Goldmann 1977: 116)の名前は、21世紀にいたるまで(DudenやPaulの辞書の見出し語として)語りつがれることになった²⁵⁾。シュモック(Schmock)は、劇中では一言もその出自につ

いて触れられていないにも関わらず、当時一般的であった「容易に宗旨替える」(Fuhrmann 1995: 174) ユダヤ人ジャーナリストに対する偏見を具現化した人物である、としばしば主張されてきた²⁶⁾。彼がユダヤ人である根拠としてよく引用されるのが、以下の台詞である。

どうして、そんなこと[敵対する政党に鞍替えること]が問題なんです？ プルーメンベルク[彼の上司]から、どっち寄りにでも書くことを学んだんです。これまでも書いてきましたよ、左寄りに、それからまた右寄りに。おれは書けるんです、どっち寄りにでも。(Freitag 1966: 47f.)

こうした点から、フライタークの喜劇では、ユダヤ人とその言語(文法的誤りにみちたドイツ語)が、(ドイツ人)市民社会とその言語規範に対立するものとして描かれていた、と考えることもできる²⁷⁾。しかし、見過ごしてはならないのは、フライタークは、主義主張のないユダヤ人(とみなされている)ジャーナリストも、高等教育を受け政治的信念も持っているジャーナリストも、同様に、いい加減な記者として描いている、という点である。グリムの辞書では、「新聞のドイツ語」(Zeitungsdeutsch)は「一般にいい加減な(lässig)ドイツ語のこと」(GWB 1956: 594f.)と説明されているが、この喜劇に登場するジャーナリストたちの言語に対する態度は、まさに「いい加減」そのものである。『ユニオン』編集者のボルツ博士は、シュモックと正反対のキャラクターであり、「理想的な編集長」(Blühm/Engelsing 1967: 186)または「たしか信念をもった党员」(Bertsch 2000: 33)ではあるが、彼もまた不誠実でいい加減な記事を書く人間として描かれている。例えば、ボルツと若い新聞記者ベルマウスがかわす以下の会話に、そのことが表れている。ベルマウスが担当した欄の校正刷りに大海蛇に関する記事を見つけた際、ボルツはその記事が「ウソ」であったためではなく、「使い古されていた」ために腹を

立てる。彼によれば、ジャーナリストは、「古い」ものや「使い古された」ものではなく、「独自の」ものや「新しい」ものを書かなければならないからである。

ボルツ：[…]「新発明の蒸気機関車」,「巨大な海蛇, 発見さる」(飛びあがる)なんてこった。またあの海蛇かよ！ 海蛇なんて、煮こごりにして食っちゃえばよかったのに。[…] どういう了見で、こんな使い古されたウソをまた記事にしたんだ？

ベルマウス：6行余ってまして、その話がちょうどいい長さだったもんですから。

ボルツ：たしかに言い訳になるかもしれんが、ろくなもんじゃないな。自分で話を考えろよ。何のためにジャーナリストになったんだ？ […] いろんなことが起きてるし、途方もなくいろんなことがまだ起きてないんだ。名誉ある新聞記者は、そういう新しいことを決して逃してはいけない。(Freitag 1966: 19f.)

紙面を埋めるためだけに虚偽の記事を書くという、ベルマウスのいい加減な仕事ぶりを、ボルツは容易に許している。なにしろ、彼自身もまた、すぐ後の場面において、翌日の社説が急遽必要となったため、部下に、オーストラリア移住に関する根拠のない記事を書くよう指示しているのである²⁸⁾。誇張にみちた、あるいは根拠のない記事は、ボルツにとってのジャーナリストの原則を明確に表している。彼は、かつての恋人に再会した際、ジャーナリストは「面白おかしく意味深長に」書きたがるものだとも認めている²⁹⁾。

僕はジャーナリストになったんだよ、お嬢様。[…] この組合に入ってしまうと、面白おかしく、あるいは意義深いことを書きたいという功名心が起りかねない。それから先のことは、僕たちの知ったことじゃない。[…] 僕たち新聞記者は、日々目新しいことを書き

て、みんなの精神にエサを与えているんだ。
(Ebd.: 77)

ボルツは、ここで、あたかも自分がすべての新聞記者を代表しているかのように発言しているが、実際のところ、彼は、新聞を通じて世論を操作しようとする政治的ジャーナリストを代表しているにすぎない。「主義主張のない」シュモックでさえ左寄りか右寄りに書いているように、この作品には政治的な(ふりをしている)ジャーナリストしか登場しない³⁰⁾。上述の2作品ではジャーナリストによる文芸批評が中心的に扱われているが、この作品では、文芸を担当しているのは駆け出しのベルマウスだけで、しかも、彼の編集部における仕事はおもに政治活動の手伝いである。

ジャーナリストがすべて政治的な(ふりをしている)人物として描かれているように、新聞の言語は、この作品では一貫して、読者を扇動するための政治的な道具として描かれている³¹⁾。ベルク大佐が他紙に寄稿した記事に対する『ユニオン』の批判的なコメント(「この寄稿者の愚鈍さを滑稽だと思ふべきか、それとも哀れだと思ふべきか、きっと読者は悩むことだろうが、いずれにせよこの寄稿者が出る幕ではない」[Ebd.: 11])や、選挙戦後の大佐に対する同紙の好意的なコメント(「我々の対立候補[大佐]が、その誠実で高貴な性格から多くの友人知人たちに支持されていることは、今さらここで賞賛するには及ばない」[Ebd.: 83])は、この特徴を明確に表しているだろう。フライタークは、新聞の言語がもつ世論形成という社会的な機能に焦点をあてているのである³²⁾。その際、その文体は二次的な問題とされ、目的のためには「ひどい(niederträchtig)文体」(Ebd.: 86)さえ用いられた。事実在即した報道のみを行う新聞記者とは違い、政治的な目的をもったジャーナリストには、文体の良し悪し以上に、読者に特定の認識を与え、特定の感情を引き起こさせるという重要な使命があるからである³³⁾。報道機関のもつこの側面を際立たせるために、フ

ライタークは、シュッツェの作品でしつように強調されていたジャーナリストの教養の高さを、背景に押しやろうとしているように思われる。一例を挙げるならば、19世紀中期においては、ジャーナリストはその「生きた外国語能力」によって高い名声を得ていたのであるが、彼は1887年に出版された決定版において、ジャーナリストたちがフランス語で話す場面を削除している³⁴⁾。

彼の作品において、ジャーナリストは、もはや教養をほこり気取った文体で文芸批評をおこなう職業ではなく、辛らつなことで世論を形成する政治的な職業として描かれている。以上の点から、フライタークが手紙の中で述べた「進歩」とは、新聞メディアが世論形成機関としての機能を獲得したことであり、とみなせるだろう。

Ⅲ. 舞台裏——ドイツにおける新聞メディアの変遷

歴史上のジャーナリストに関していえば、19世紀中期にいたるまで、その多くが高い教養を有しており、教養市民層の一角を成していた。Requate (1995) の調査によれば、1800年から1848年までに活動したジャーナリストのうち84.5%が大学教育を受けており、そのうち56%が博士号を取得している³⁵⁾。また、18世紀から19世紀にかけての世紀転換期においては、書き手であるジャーナリストだけでなく、読み手もまた上流階級および教養市民層が中心であった³⁶⁾。この時期、こうした読者を対象に隆盛をほこったのは、クリストフ・マルティン・ヴィーラント(Christoph Martin Wieland, 1733-1813)の『ドイツ・メルクーア』(*Der Teutsche Merkur*)を嚆矢とした、芸術愛好家向けの文芸新聞である。これらの新聞は、毎号およそ500部刷られるていどの小規模なもので、中心となる記事は小説や文芸批評であった³⁷⁾。その文体に関していえば、たとえば『教養層のための朝刊』(*Morgenblatt für gebildete Stände*)のよう

に「18世紀からの古い、気取っている (geziert) ことも稀ではない文体」(Salomon 1906a: 230) で書かれることもあれば、『ウィーン一般劇場新聞』(*Wiener allgemeine Theaterzeitung*)³⁸⁾ のように「サロンにおけるかなり勝手気ままな (recht leichtfertig) おしゃべりの調子」(ebd.: 246) で書かれることもあった。こうした新聞は、1830年代以降の政治的な動乱を通じて次第に人気を失っていった。19世紀の史学者 Wuttke のことばを借りるなら、「人々には、今や、長ったらしい書評を読む以外にすることが、そう、はっきり言ってしまえば、もっとましなことが」(Wuttke 1875: 53) あったのである。文芸新聞を離れた読者を取り込んでいったのは、七月革命以降、とりわけ三月革命以降に急速に成長した政党新聞 (Parteipresse) であり、彼らは、新聞を通じて政治的な活動に参加していった³⁹⁾。こうした新聞は、1840年代にはすでに、選挙戦において重要な役割を演じていた⁴⁰⁾。

19世紀初頭のジャーナリストにくらべ、政党新聞が普及していく19世紀中期以降のジャーナリストの教養レベルは、統計調査が行われないうちに、ながらく不当に低く評価されてきた。この点に関して、たとえば、アルトゥール・ショーペンハウアー (Arthur Schopenhauer, 1788-1860) は、遺稿 (1860) の中で以下のように述べている。

著しく一般的で、もっとも有害なドイツ語の毀損は、きわめて偏狭な無知によって引き起こされている。その主な運用者は、本屋の雇われ人と新聞記者である。(Schopenhauer 1896: 122f.)

また、商業紙を敵視していた、フェルディナント・ラッサール (Ferdinand Lassalle, 1825-1864) も、1863年の全ドイツ労働同盟の集会における演説で、新聞記者の「無知」を槍玉にあげている⁴¹⁾。

もしも、今日の民衆の教師である何千もの新聞記者が、何十万もの声で、日々、その馬鹿げた無知を、その良心のなさを、政治や芸術、学問の分野における全ての正しいもの、偉大なるものに対するその宦官めいた憎しみを、民衆に吹き込むなら、彼らが精神を強めるためにそれらを創りだしたのだと信じ、信頼してこの毒に手を伸ばしてしまう民衆に吹き込むなら、かならずや、民衆の精神は地におちてしまうことでしょう！ (Lassalle 1919: 358f.)

19世紀後半にジャーナリストの教養レベルが下がったとする言説は、当時の批評家だけでなく、現代のメディア史研究家によっても行われている⁴²⁾。しかしながら、彼らの教育水準に関して言えば、1849年から1869年に活動したジャーナリストのうち、87.5%が大学教育を受けており、博士号取得者はそのうちの58.5%である⁴³⁾。つまり、三月革命以前とくらべて、ジャーナリストがより低い教養しか持ちあわせていなかったなどという事実はないのである。1820年代から60年代にかけては、供給過剰になった学識者が収入を求めてジャーナリズム業界に足を踏み入れる、という状況が続いていた。例えば、Wehler (1987) は、三月前期のベルリンで博士号を取得した人数の増加を指摘している (1820-1829: 851人, 1830-1839: 1,260人, 1840-1849: 1,347人)⁴⁴⁾。ただし、政治的な新聞においては、フライタクが描いたように、辛らつに攻撃するため、あるいは滑稽に茶化すために、書き手の教養レベルとは無関係に「ひどい文体」さえ使用されることがあった。例えば、風刺紙『ブッデルマイアー新聞』(*Buddelmeyer-Zeitung*) には、架空のベルリン市民ブッデルマイアーの日記を模した「ブッデルマイアーの日記からのピラ」と題する欄が設けられていた。その記事では、„g“が„j“に„ei“が„ee“に換えられる、語末の„t“が省略されるなど、書きことばとしては当時は軽視されかねなかった日常的・方言的な言語変種が用

Mar. 2016

舞台の上のジャーナリスト

いられている⁴⁵⁾。

Am 3. Januar sind die Kammern wieder eröffnet. Da Herr v. Mäusebach sich in de Wallachei befindet, so hat er keenen Leichenjeruch nich in de Kammern riechen können. Den Braten aber haben alle jerochen. (*Buddelmeyer-Zeitung*, 6. Jan. 1851: 7)

(1月3日に議会がまた開かれた。フォン・モイゼバッハ氏は去勢中でおらんけえ、議場にはヤツの死臭がせんかった。じゃけど、みんな焼肉のにおいは嗅ぎつけた)

この「日記」は、実際には、この新聞の編集者であり医師でもあったアーダルベルト・コーンフェルト (Adalbert Cohnfeld, 1809-1868) によって書かれたものであり⁴⁶⁾、彼が意図的にこのような言語変種を使用したことは、この新聞の他の記事が規範的な言語変種で書かれていることをみれば明らかである。こうした政治的ジャーナリストの言語使用は、なぜショーペンハウアーが説明もなく「政治的な新聞」を「著作物の中でもっとも低級な分野」(Schopenhauer 1896: 120) と呼び、そこで使用される言語を激しく非難したかを説明しているかもしれない。

一方で、フライタークの戯曲に引き立て役として登場する(とみなされている)ユダヤ系ジャーナリストは、19世紀において、自由主義の新聞だけでなくユダヤ人向けの特種な新聞雑誌でも活躍しており、ジャーナリズムおよび出版業界において大きな役割を演じていたが⁴⁷⁾、彼らの存在もまた、ジャーナリストの質が下がったとする批判の原因となっている。興味深いことに、自らもユダヤ系であるラッサールは、前述の、新聞記者の質が落ちているという旨のアジテーションの中で、その一例として一人のユダヤ人ジャーナリストの言語能力を挙げている。彼は、自由民主主義の『民衆新聞』(*Volks-Zeitung*)のユダヤ人編集者、アーロン・ベルンシュタイン (Aron Bernstein, 1812-

1884)の言語能力を以下のように批判する⁴⁸⁾。

ドイツ語を一度も書けたことのない男が、独特のごちゃませことば (eigentümliches Kauderwelsch) ——ひとつとして文法的誤りのない文がない——いわゆるユダヤふうドイツ語を読者に吹き込み、じょじょに、しかし確実に民衆の言語と精神を台無しにしていくのです! (Lassalle 1919: 357f.)

この新聞が、当時3万3千人もの定期購読者を持ち、「全ドイツでもっとも読まれている政治的な新聞のひとつ」(Ebd.: 358)であったことを考慮すると、ラッサールの問題意識も不当なものではなかったと思われる⁴⁹⁾。

IV. おわりに

上述の戯曲に関して言えば、ツイッテヤシュツツェの作品で描かれたのは、世紀転換期から19世紀初頭に流行した文芸新聞(およびそれに対抗して刊行される新聞)であり、フライタークの戯曲は、文芸批評家に代わって新たに影響力を持ち始めてきた政治的なジャーナリストを中心的に扱っている。この3作品を時代順に見ていくと、19世紀初頭まで、特定の文体に対して規範意識をもち、自らを「作家」と自負していたジャーナリストが、19世紀中期には、言語を政治的な道具として扱うジャーナリストに変化していく様子が浮き彫りになってくる。そして同時に、舞台の上で強調されていたジャーナリストの教養の高さ、教養市民としての側面は背景に押しやられ、(たとえ博士号をもっていても)ユダヤ系の「三文文士」と同様に言語をぞんざいに扱い「ひどい文体」を書くジャーナリストが主役を務めるようになっていく。冒頭に述べたように、こうした舞台上のジャーナリストは、その時代を生きた実際のジャーナリストの一面を戯画化したものであり、事実をそのまま反映したものとは言いがたい。しかし、新聞メディアの変遷とともに、同時代人のいづく

ジャーナリスト像, および彼らの使用する言語への言語意識も変化したことの, ひとつの傍証といえるだろう。

注

- 1) Vgl. Eggers 1973: 9.
- 2) Vgl. DWB 1956: 598.
- 3) フライタークの作品の初演は1852年であるが, ほかの2作品の初演は筆者には不明である。ツイッテの作品に限って言えば, その成立過程からして一度も上演されなかった可能性もある。
- 4) この作品の原題は*Die Zeitungsschreiber*であるが, 作者はこの語を「新聞編集長」(Zeitungsverweser)の意で用いており, 邦訳もそれにしたがった。なお, 18世紀後半から19世紀中期にかけては, „Zeitungsschreiber“, „Zeitungsverfasser“, „Journalist“, „Tagesschriftsteller“などが, それぞれ異なったニュアンスを含みながら, 新聞製作にたずさわる人物の職業名として使用されていた。Vgl. Wuttke 1875: 23, 105; DWB 1877: 2338; Requate 1995: 132.
- 5) Vgl. Blühm/Engelsing 1967: 116; Meusel 1968: 440.
- 6) Vgl. Zitte 1781: 3; Blühm/Engelsing 1967: 116; Meusel 1968: 440.
- 7) Vgl. Kürnberger 1991: 9f.; Polenz 1999: 58f.; Elspaß 2005: 41.
- 8) Vgl. Zitte 1781: 26ff.; ADB Bd.28 1889: 521ff.
- 9) Vgl. Zitte 1781: 7f., 18, 26.
- 10) Vgl. Zitte 1781: 32ff.
- 11) Vgl. Blühm/Engelsing 1967: 116.
- 12) Vgl. ADB Bd. 33 1891: 146f.
- 13) ただし, フライターク自身が認めているように, シュッツェの喜劇と, 彼がのちに書く同名の戯曲には多くの共通点があり, 彼がシュッツェの作品を否定的にしか受け取らなかったとは思えない。例えば, ひとつの町の対立する2紙, ジャーナリストと退役軍人の娘との恋, 退役軍人による新聞への寄稿, (商業的あるいは政治的な) 目的のために虚偽の報道を行うジャーナリスト, 女性が立ち回ることによって結ばれる2組の結婚など。Vgl. Schütze 1806: 5, 13f., 17, 29, 43f.; KreiBig 1966: 117; Freytag 1994: 104.
- 14) Vgl. Schütze 1806: 2, 6, 13.
- 15) Vgl. Schütze 1806: 33, 35.
- 16) Vgl. Schütze 1806: 13, 22ff., 30f., 44.
- 17) Vgl. Schütze 1806: 39f.
- 18) Vgl. Schütze 1806: 21f., 43f., 46f.
- 19) Vgl. KreiBig 1966: 117; Freytag 1994: 104.
- 20) Vgl. Koszyk 1966: 225.
- 21) Vgl. Koszyk 1999: 906.
- 22) Vgl. KreiBig 1966: 114f., 120f.; Goldmann 1977: 113; Freytag 1995: 130ff.; Gubser 1998: 177f.
- 23) Vgl. Wuttke 1875: 75; ADB Bd.48 1904: 755ff.; Bertsch 2000: 29f.
- 24) Vgl. KreiBig 1966: 115; Goldmann 1977: 115; Gubser 1998: 186.
- 25) Engelsingは, ジャーナリストが避けるべき誘惑として, 「シュモック仕事」(Schmockarbeit)なる合成語を使用している。Vgl. Engelsing 1966: 271; Gubser 1998: 178; Paul 2002: 863; Duden 2006: 899.
- 26) その理由として, Gubser (1998) は以下の点を挙げてている。1. 「シュモック」という名前がプラハのゲッターに由来すること, 2. シュモックは赤いちぢれっ毛でもいわゆるユダヤ人鼻でもないが, 貧相な外見をしていること, 3. 質問されると, つねに質問で答えること (Gubserによれば, これは「典型的なユダヤ人の」習慣である), 4. シュモックの発話における「誤った語順」(Gubser 1998: 182) (枠外配置の多用: „Ich kann auch gehen allein. [...] Ich will sehen, ob ich's kann hinunterschlucken.“ (Freytag 1966: 46) が, ユダヤ訛りとみなせること, 5. 最終幕で, 「がめつい男」としてふるまうこと。Gubserはさらに, 名前が „-berg“ で終わっているという理由で, ブルーメンベルクもユダヤ人であると主張している。Vgl. Goldmann 1977: 116; Fuhrmann 1995: 174f.; Gubser 1998: 178ff., 182f., 187; Bertsch 2000: 33; Paul 2002: 863; Schwitalla 2006: 115ff.
- 27) Vgl. Goldmann 1977: 116, 118.
- 28) その記事では, オーストラリアは以下のような所とされている。「カンガルーは[...], 執念深く入植者の頭めがけて飛びかかってくる。一方, カモノハシは, 入植者たちの脚をついばむ。[...] それらすべてを耐え忍んだとしても, 最後にはどろぼうのような原住民たちによって食いつくされてしまう」(Freytag 1966: 25) Vgl. Bertsch 2000: 31.
- 29) Vgl. Bertsch 2000: 32f.
- 30) この戯曲では, すでに第1幕第1場から, 政治的なジャーナリストが新聞記者一般として(否定的に)扱われている。退役大佐であるベルクは, 公然と相手を非難しあう政党新聞のジャーナリストたちを, 「しかし, ジャーナリスト殿たちは, 女のような神経を持っておられるな。なんにでも興奮して, 誰かに言われたあらゆる言葉に, いちいち腹を立ておる! わしに言わせれば, あんたらは敏感すぎるよ」(Freytag 1966: 11)と嘲笑する。しかし, この大佐自身も, 自らが新聞紙上で嘲笑された際には, 以下のように激怒している。「下品な連中だ, このペンの紳士たちは! 卑怯で, 悪意に

Mar. 2016

舞台の上のジャーナリスト

満ちていて、匿名の陰に隠れて悪だくみしおって」
(Freytag 1966: 85)

- 31) Vgl. Bertsch 2000: 30ff.
- 32) 例えば、ボルツの新聞によって扇動された大勢の市民が、大佐の館に押し寄せている。Vgl. Freytag 1966: Akt.3.
- 33) Vgl. Requate 1995: 291.
- 34) ジャーナリストがフランス語で話す第1幕第2場は、もともとカールスルーエ宮廷劇場の監督のアイデアで、外国語とドイツ語が混在するという面白さを狙ったものであった。この場面は、初版ではそのまま印刷されているが、決定版ではドイツ語のみが話されるよう変更されており、なぜ外国の踊り子が突然現れるのか不自然な印象をうける。Vgl. ADB Bd.47 1903: 699; Freytag 1966: 31f.; KreiBig 1966: 118ff.; Freytag 1977: 30f.; Goldmann 1977: 114; Wehler 1987: 210f.; Nipperdey 1993a: 593.
- 35) Vgl. Requate 1995: 143, 149.
- 36) Vgl. Polenz 1999: 82.
- 37) 中でも、1807年にコッタ社によって創刊された『教養層のための朝刊』は、幅広い地域に購読者を獲得し、19世紀初頭における最も重要な文芸新聞とみなされている。Vgl. Wuttke 1875: 68; Salomon 1906a: 231; Salomon 1906b: 214; Obenaus 1986: 8, 39.
- 38) この新聞は、50年間に21度もタイトルを変えているので、編集長の名前をとって、『ボイアーレ劇場新聞』(*Bäuerles Theaterzeitung*)と呼ばれることも多い。Vgl. Estermann 1991: 309f.
- 39) Vgl. Salomon 1906b: 502, 551; Schobloch 1974: 5; Henkel 1986: 555; Obenaus 1986: 39.
- 40) Vgl. Wilke 2008: 190ff.
- 41) Vgl. Blühm/ Engelsing 1967: 187.
- 42) Vgl. Nipperdey 1993b: 805; Requate 1995: 144; Stöber 2000: 196; Wilke 2008: 292.
- 43) Vgl. Requate 1995: 143, 149; Wilke 2008: 292.
- 44) なお、1850年ごろには、およそ22,000人の学識のある官僚や牧師、教員、医師らが教養市民層の中核を形成しており、それ以外にも比較的小規模な社会層に属する学識者(神父、ジャーナリストら)がいた。また、1800年から1869年に活動し、大学教育を受けていたジャーナリストの54%が文献学、32%が法学、12%が神学を専攻していた。Vgl. Wehler 1987: 520; Requate 1995: 158f., 162; Wehler 1995: 126.
- 45) この新聞は、三月革命直後に創刊された、数多くの政治風刺新聞のうちのひとつである。Vgl. Wilke 2008: 238.
- 46) Vgl. DSL Bd.2.1 1998: 96.
- 47) 1899年のベルリンにおける宗旨調査によれば、全

編集者のうち18%がユダヤ教徒であった。なお、68%がプロテスタント、11%がカトリックであった。Vgl. Requate 1995: 140f.; Wilke 2008: 293.

- 48) ラッサール自身は、プレスラウとベルリンで大学教育を受けている。一方、バルンシュタインは、ユダヤ教の経典学校を出ただけで、世俗の高等教育は受けておらず、ドイツ語も独学で身につけている。Vgl. NDB Bd.2 1955: 133; NDB Bd. 13 1982: 662.
- 49) ベルリンの『民衆新聞』は、1849年に『予備選挙人新聞』(*Urwähler-Zeitung*)として創刊された。この民主主義の大新聞は、1904年に『ベルリン民衆新聞』に改名し、1944年まで百年近く刊行されつづけた。Vgl. Lassalle 1919: 357f.; Stöber 2000: 207.

参考文献

- Allgemeine Deutsche Biographie* (1875-1912). 56 Bde. Leipzig. [=ADB]
- Bertsch, Johanna (2000): *Wider die Journaille. Aspekte der Verbindung von Sprach- und Pressekritik in der deutschsprachigen Literatur seit Mitte des 19. Jahrhunderts*. Frankfurt a. M.
- Blüm, Elger/Engelsing, Rolf (Hg.) (1967): *Die Zeitung. Deutsche Urteile und Dokumente von den Anfängen bis zur Gegenwart*. Bremen.
- Deutsches Wörterbuch von Jacob Grimm und Wilhelm Grimm*. Bd.15. (1956) Leipzig. [=DWB]
- Deutsches Schriftstellerlexikon. 1830-1880*. Bd. 2. (1998) Berlin. [=DSL]
- Dieckmann, Walther (1989): *Reichtum und Armut deutscher Sprache*. Berlin/New York.
- Duden. Bd. 1. Die deutsche Rechtschreibung* (2006). 24., völlig neu bearb. und erw. Aufl. Mannheim u. a.
- Eggers, Hans (1973): *Deutsche Sprache im 20. Jahrhundert*. München.
- Engelsing, Rolf (1966): *Massenpublikum und Journalistentum im 19. Jahrhundert in Nordwestdeutschland*. Berlin.
- Freytag, Gustav (1966) [1887]: *Die Journalisten. Lustspiel in 4 Acten*. Faksimiledruck nach der Ausgabe innerhalb der Gesammelte Werke von 1887. Göttingen.
- Freytag, Gustav (1977) [1854]: *Die Journalisten. Lustspiel in vier Akten*. Stuttgart.
- Freytag, Gustav (1994): *Gustav Freytags Briefe an die Verlegerfamilie Hirtzel*. Tl. 1. Berlin.
- Freytag, Gustav (1995) [1886/87]: *Erinnerungen aus meinem Leben*. Berlin.

- Fuhrmann, Horst (1995): Nachwort des Herausgebers. In: Gustav Freytag: *Erinnerungen aus Meinem Leben*. Berlin. S.172-182.
- Goldmann, Bernd (1977). Nachwort. In: Gustav Freytag: *Die Journalisten*. S.111-118.
- Gubser, Martin (1998): *Literarischer Antisemitismus. Untersuchungen zu Gustav Freytag und anderen bürgerlichen Schriftstellern des 19. Jahrhunderts*. Göttingen.
- Koszyk, Kurt (1966): *Deutsche Presse im 19. Jahrhundert*. Berlin.
- Koszyk, Kurt (1999): Allgemeine Geschichte der Zeitung. In: Joachim-Felix Leonhard u. a. (Hg.): *Handbücher zur Sprach- und Kommunikationswissenschaft*. Bd. 15. 1. Medienwissenschaft. Berlin/New York. S.896-913.
- Kreißig, Horst (1966): Nachwort. In: Gustav Freytag: *Die Journalisten*. Faksimiledruck nach der Ausgabe innerhalb der Gesammelten Werke von 1887. Göttingen. S.113-124.
- Lassalle, Ferdinand (1919) [1863]: Die Feste, die Presse und der Frankfurter Abgeordnetentag. Drei Symptome des öffentlichen Geistes. In: Ders.: *Gesammelte Reden und Schriften*. Bd. 3. Berlin. S.333-402.
- Meusel, Johann G. (1986) [1816]: *Lexikon der vom Jahr 1750 bis 1800 verstorbenen deutschen Schriftsteller*. Bd. 15. Nachdruck. Hildesheim.
- Neue Deutsche Biographie* (1953-). Berlin. [=NDB]
- Nipperdey, Thomas (1993a): *Deutsche Geschichte. 1800-1866. Bürgerwelt und starker Staat*. 6. Aufl. München.
- Nipperdey, Thomas (1993b): *Deutsche Geschichte. 1866-1918. Bd.1. Arbeitswelt und Bürgergeist*. 3. Aufl. München.
- Paul, Hermann (2002): *Deutsches Wörterbuch. Bedeutungsgeschichte und Aufbau unseres Wortschatzes*. 10., überarb. und erw. Aufl. Tübingen.
- Requate, Jörg (1995): *Journalismus als Beruf. Entstehung und Entwicklung des Journalistenberufs im 19. Jahrhundert*. Göttingen.
- Schopenhauer, Arthur (1896): Ueber die, seit einigen Jahren, methodisch betriebene Verhöhnung der Deutschen Sprache. In: Ders.: *Einleitung in die Philosophie nebst Abhandlungen zur Dialektik, Aesthetik und über die deutsche Sprachverhöhnung*. 3. Aufl. Leipzig. S.118-182.
- Schopenhauer, Arthur (1986) [1851]: Parerga und Paralipomena. In: Ders.: *Sämtliche Werke*. Bd.5. Frankfurt a. M.
- Stöber, Rudolf (2000): *Deutsche Pressegeschichte*. Konstanz.
- Straßner, Erich (1999): *Zeitung*. 2. Aufl. Tübingen.
- Wehler, Hans-Ulrich (1987): *Deutsche Gesellschaftsgeschichte. Bd.2. Von der Reformära bis zur industriellen und politischen «Deutschen Doppelrevolution». 1815-1848/49*. München.
- Wehler, Hans-Ulrich (1995): *Deutsche Gesellschaftsgeschichte. Bd. 3. Von der «Deutschen Doppelrevolution» bis zum Beginn des Ersten Weltkrieges. 1849-1914*. München.
- Wilke, Jürgen (2008): *Grundzüge der Medien- und Kommunikationsgeschichte*. 2. durchgesehene und ergänzte Aufl. Köln u. a.
- Wuttke, Heinrich (1875) [1866]: *Die deutschen Zeitschriften und die Entstehung der öffentlichen Meinung*. 3. Aufl. Leipzig.
- Zitte, Augustin (1781): *Die Zeitungsschreiber. Ein komisch-Farcikalischer Schwank in zwey wunderlichen Zusammenkünften*. Prag.